

# 日本一のハクチョウ越冬地～越後平野の潟と田んぼ —新潟県水鳥湖沼ネットワークの連携調査—



佐藤安男／新潟県水鳥湖沼ネットワーク／水の駅「ビュー福島潟」

## 1. はじめに

越後平野には、広大な水田が広がり、ガン・カモ・ハクチョウ類のねぐらとなる多数の湖沼があります。その中で主要な瓢湖・福島潟・鳥屋野潟・佐潟の4湖沼で、関係者が協力して2000年に新潟県水鳥湖沼ネットワークを結成し、ハクチョウ、ガン類の生息数同時調査を開始しました。17年間の継続調査からさまざまなことがわかってきましたので調査の取り組みや調査結果などについてご紹介します。

## 2. 活動のきっかけ

### 2.1. 目的

越後平野に渡来するハクチョウ、ガン類の生息状況把握（新潟平野の各湖沼に、いつ、どのくらいの数のハクチョウ・ガン類が飛来するのか？1シーズンを通して越冬数にどのような変化があるのか？）

### 2.2. 背景、活動へ

2000年、「生きた情報のやりとりができたらいね。やろうよ。」などの雑談から端を発し、新潟県湖沼ネットワークの取り組みが始まりました。これは新潟県最大の平野、越後平野（新潟平野）にある湖沼の中で冬鳥の主な越冬地とされる4湖沼（豊栄市（現新潟市北区）・福島潟、水原町（現阿賀野市）・瓢湖、新潟市・鳥屋野潟及び佐潟）の初の連携となりました。また、この活動は行政、市民、NGOそれぞれが協力し合う活動となり、立場を超えた地域ネットワーク（福島潟：豊栄市：水の駅「ビュー福島潟」、瓢湖：水原町観光管理事務所・佐藤巖、鳥屋野潟：日本野鳥の会新潟県支部・岡田成弘、佐潟：佐潟水鳥・湿地センター・佐藤安男等が軸となって活動）という位置づけにもなりました。目的は水鳥飛来情報の共有と湖沼間の連携であり、その情報を市民県民に発信することにより、新潟県がガン・カモ類の大切な生息地として、水田を含めた湿地・湖沼域の価値ある自然環境を保有していることを理解してもらうための一助になればという思いでした。活動早々から、聖籠町弁天潟、新

潟田市升潟の有志の協力による連携があり、さらに各湖沼で各野鳥保護団体の有志が参加し、ネットワークの広がりを見ました。

### 2.3. 資料：2004年当時の佐藤安男のメモより

『佐潟水鳥・湿地センターがオープンしまもなく6年目を迎えます。多くの皆様から教をいただき私の勤務も6年目になろうとしています。この間、関係者予想を上回る来館者を数えてきましたが、特に冬場、水鳥の姿を求めて来館する方が過半数を占め、市民の関心の高いことを感じてきました。その中でも「ハクチョウを」「ハクチョウは？」という声が多かったです。「佐潟はハクチョウだけではないのになあ～」と思いつつ、しかしハクチョウという水鳥の視点を通して佐潟のこと、自然のこと、そして人との関わりなどを、共に考え、伝え、協調していけるチャンスであると考え実践してきているところです。

そのハクチョウについて学習していくと、文献では得にくい生の情報が目の前に広がり、おぼろげな疑問や問題が出てきます。幸い福島潟や瓢湖との個人的な横のつながりを持つことができ、一昨年「第2回ラムサールシンポジウム IN 新潟（2001年）」で発表した「新潟県湖沼ネットワーク」の連携調査という作業ができました。』

## 3. 活動内容

### 3.1. 各湖沼におけるハクチョウ、ガン類の生息調査

3.1.1 調査方法：飛来・越冬期間である10月1週から翌年3月まで毎週金曜日の朝、福島潟、瓢湖、鳥屋野潟、佐潟それぞれの湖沼で夜明けから同時刻にハクチョウ類、ガン類の全数カウントを開始、10月1週から翌年3月最終週までを同一年度として、湖沼環境の情報等も含め集計し共有化を行っています。2013年からは阿賀野川（大阿賀橋付近）の調査地が加わり5カ所で調査集計しています。

3.1.2 調査者：各湖沼の関係者（行政機関や個人、野鳥の会会員など有志）

湖沼名 --- 調査担当

瓢湖（阿賀野市）／阿賀野市瓢湖管理事務所、瓢湖の白鳥を守る会、有志

福島潟（新潟市）／水の駅「ビュー福島潟」、有志

阿賀野川（新潟市）／新潟県水鳥湖沼ネットワーク有志

鳥屋野潟（新潟市）／日本野鳥の会新潟県、有志

佐潟（新潟市）／有志、佐潟水鳥・湿地センター

### 3.1.3 調査地概要



調査地の位置と距離

### 3.1.4 各調査地の環境

#### (1) 瓢湖



飯豊連峰を背景にした五頭山塊に近く、住宅街に隣接、田んぼに囲まれています。江戸時代に農業用水池として人工的に造成されたもので、水害時には貯水して水害を防ぐ役目は果たしてきました。大小2つの四角い池がちょうど瓢箪の形をしていたので瓢湖と呼ばれるようになりました。近年、さくら池やあやめ池が造成され水鳥の生息域が広がりました。かつて日本の自然保護の発祥ともいえるハクチョウの餌付けに初めて成功し「白鳥の湖」として全国に知られています。現在、瓢湖水きん公園として自然環境を利用した自然観察や市民の憩いの場として親しまれています。

#### (2) 福島潟



新潟市北区と新発田市にまたがる面積 262ha の潟。これまでに 220 種類以上が確認された野鳥の宝庫であり、国の天然記念物オオヒシクイの日本一の越冬地です。ヨシで覆われた島が複雑に入り組んだ地形で、警戒心の強いオオヒシクイやマガンなどが安心して過ごせる生息地になっています。絶滅危惧種で、葉の直径が 2m を超える日本最大の水生植物オニバスの北限の自生地であり、ミクリやミズアオイなど希少な水生植物の生育する自然環境を有しています。五頭連峰を映す湖面と、多くの生き物たち、そして人が一体となって織りなす四季折々の景観。新潟の原風景を今に残しています。

#### (3) 鳥屋野潟



新潟駅から 2-3 km 南東に位置。面積約 158ha、海拔 0 m 以下で亀田郷の遊水地としての機能を担っています。栗ノ木川が合流する一級河川でもあります。市街に隣接しながらも 4,000 羽を超えるコハクチョウが飛来し、春と秋に多くの渡り鳥が立ち寄ります。周辺にはヨシの群落が発達し、湖面にはコウホネ・ヒシが繁茂しています。サッカー場として知られたビッグスワンを象徴とし北側と南側には鳥屋野潟公園があります。自然と共生する公園、市民の憩いの場として整備が進められています。鳥屋野潟の南に隣接して内湖の清五郎潟があります。

(4) 佐潟



砂丘列間のくぼ地にあり主に湧水で涵養されています。流入する河川はありません。佐潟は日本海から約2kmのところのところに位置し、南西の上潟と北東の下潟を合わせた湿地面積は76haです。佐潟周辺に遺跡が見つかるなど平安時代以前から人々との大きな関わりがあり近年まで水田耕作や漁業がさかんに行なわれてきました。自然生態観察型公園として整備され、1996年ラムサール条約登録を契機に「佐潟自然環境保全計画」が策定、特に地元主体の保全とワイズユースが進められています。角田山を背景とした景観と夕陽がきれいです。

(5) 阿賀野川（大阿賀橋付近）

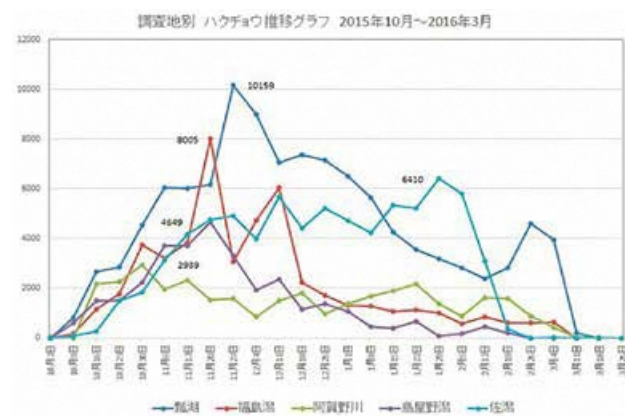


福島県・群馬県を源流として日本海に注ぐ一級河川。福島県では阿賀川（または大川）と呼ばれていますが、新潟県に入ると阿賀野川と名前を変えます。全長はおよそ210kmで、その長さは国内第10位を誇ります。河口域（最下流域）は、環境省が定めた日本の重要湿地500に選定されています。河口から10km程にある大阿賀橋から14km付近にある横雲橋にかけては、市内でも有数のコハクチョウの越冬地となっており、中州などでねぐらをとる2,000羽以上を確認することができます。この範囲は、鉛散弾の使用は禁止されているものの、残念ながら鳥獣保護区には指定されていません。

3.1.5 調査結果

調査年度	調査地	調査日	調査者	調査時間	調査内容	調査結果	備考
2016年度	瓢湖	11月27日	佐藤 隆	10:00-12:00	コハクチョウの生息数調査	10,159羽	
2016年度	福島潟	11月20日	佐藤 隆	10:00-12:00	コハクチョウの生息数調査	8,005羽	
2016年度	阿賀野川	11月10日	佐藤 隆	10:00-12:00	コハクチョウの生息数調査	4,649羽	
2016年度	鳥屋野潟	11月10日	佐藤 隆	10:00-12:00	コハクチョウの生息数調査	2,999羽	
2016年度	佐潟	11月10日	佐藤 隆	10:00-12:00	コハクチョウの生息数調査	6,430羽	

毎週金曜日の調査結果を集計したシート例



湖沼別ハクチョウ数推移（2015年度）

- ◆ 2015年度のハクチョウ生息数の特徴について
  - ・瓢湖～11月27日に過去最大の10,159羽
  - ・福島潟～11月20日に過去最大の8,005羽
  - ・阿賀野川～越冬初期～終期まで一定の利用
  - ・鳥屋野潟～11月、12月は暖かく多かった

3.1.6 17年間の調査結果からわかったこと

ハクチョウ類は10月の中旬頃から飛来し、徐々に数を増やして11月下旬頃に最大数となります。その後、減少傾向（おそらく一部は県外へ南下、一部は県内分散）ながらも1月までの2カ月間はほぼ同じ数で推移、瓢湖と福島潟の高い生息ウエイトから「佐潟」に少しずつシフトしてきます。鳥屋野潟はその中間に位置づけされます。また急な積雪や結氷など採食環境、生息環境の変化に伴い一気に移動するグループがあり、各湖沼間のねぐら利用を変えてきます。その移動の数は、気象環境の深刻度によるようです。基本的には生息数が減少した湖沼があれば、それを補完する湖沼がある構図であり、大雪などのそれ以上の生息環境の悪化は佐潟の利用が最大となるほか県外への移動も多くなるのではないかと思います。

このように、「ハクチョウたちは積雪などの気象条件の変動により県内の各湖沼間（採食地）を移動している」また印象として、「柔軟に行動するハクチョウたちがいる反面、我慢強いハクチョウたちもいる。ヒシクイはハクチョウよりかなり我慢強く、行動の際はよりダイナミック」ともいえるようです。



まだ雪の少ない11月～12月ころ（積雪深小）



積雪となる1月～2月ころ（積雪深大）

以下の写真は2008年1月21日の各調査地と周辺水田を撮影したのですが、同日でも越後平野内の積雪環境はだいぶ違うことがわかります。



瓢湖（左）と周辺水田（右）



福島潟（左）と周辺水田（右）



鳥屋野潟（左）と周辺水田（右）



佐潟（左）と周辺水田（右）

以上のことからおおむね積雪の多い「瓢湖・福島潟」と少ない「鳥屋野潟・佐潟」に分けられると考えます。また、ハクチョウたちは通常、各湖沼（潟）をねぐらとして、周辺水田（田んぼ）を採食地として利用して生活しています。



安心できる「ねぐら」と落ち粳や二番穂がある「採食地」が近距離でセットとしてある環境がハクチョウたちにとって大切な環境と考えられます。



朝、ねぐらを飛び立ち、田んぼで採食する



佐潟にヒシクイ飛来。大雪など福島潟周辺で長期間採食できなくなると佐潟にやってきます。



ヒシクイのほかハクガンやシジュウカラガンも田んぼが重要な採食地となっています。

### 3.1.6 考察

- 1) ハクチョウは天候等に応じて移動しながら4つの湖沼を使い分け、2万羽を超える個体が越後平野で越冬しているものと考えられます。
- 2) 積雪時の個体数変動から降雪量と採餌場所に密接な関係があることが推察されます。
- 3) 10年間でハクチョウ飛来数が増加していることが示されました。

### 3.1.7 生息調査まとめ

調査結果については学術的な価値や精度が問われることもあるかもしれませんが、ハクチョウ、ヒシクイ類の渡来から北帰までの越冬状況を複数の湖沼で同時に観察調査したことは初めての試みであり、各湖沼の性格(利用のされ方)の違いと相互のつながりの重要性をあらためて確認できたことは地域ネットワークによる大きな成果と言えると思います。



### 3.1.8 調査結果発表事例

(2007年日本白鳥の会新潟総会での発表の一部)

**全国カモ科鳥類一斉調査(環境省)**

2005年1月15日の調査結果では、ハクチョウ類は全国で約8万羽、新潟県では約2万羽が確認され、都道府県別では新潟県が最も多い

- 新潟県では約95%がコハクチョウで、オオハクチョウは少ない
- コハクチョウ数が1万羽を越えていたのは新潟県のみ

(新潟県調査:新潟県野鳥愛護会)

---

**新潟平野湖沼群に  
飛来・越冬するハクチョウ**  
(鳥屋野潟・佐潟)

新潟県水鳥湖沼ネットワーク  
岡田 成弘 (日本野鳥の会新潟県支部)  
佐藤 安男 (佐潟水鳥湿地センター)

---

**7年間の調査結果**

- ・飛来・越冬数推移  
10月第2週頃に各湖沼に飛来  
11月下旬から12月に最大総数  
1月上旬頃までほぼ同じ数で推移  
天候等により変動がある  
2月以降は徐々に減少、3月下旬に飛去
- ・コハクチョウ飛来数は新潟市の3湖で最大1万羽を超え、4湖合わせ最高で約16,000羽であった
- ・最大羽数は2000年以降増傾向にある

---

**まとめ**

- 広大な新潟平野には、安心して休むことのできるアシ原に囲まれたねぐら(湖沼)と餌場(水田)があり、2万羽近くのハクチョウが半年間生息することができる豊かな自然環境が残る
- 新潟平野全域を利用して越冬しているため、いずれかの潟(湖沼)の環境が悪化すれば、現在のハクチョウ生息総数は維持できない可能性が高い

ハクチョウは湖沼を含む越後平野全域を面として利用しながら越冬していると考えられるため、いずれかの湖沼の環境が大きく変わると、各湖沼に生息するハクチョウ

ウ全体に影響を与えることとなり、現在のハクチョウ生息数を維持することは難しいと推測されます。ハクチョウの飛来・越冬数を維持するためには、各湖沼の環境保持または再生などの保全活動が大切であり、佐潟同様にラムサール条約の登録もひとつの方法と考えられます。

### 3.2. 調査結果集計及び関係機関等へのデータ提供

#### 3.2.1 調査結果集計シートの配信

調査結果を集計し、調査者だけでなく各湖沼や野鳥関係者にも配信。

項目は、①種：オオハクチョウ数、コハクチョウ数、ハクチョウ類計、ヒシクイ数、マガン数、その他ガン類（ハクガンやシジュウカラガンなど）②出現鳥類、③全体的な様子、情報、④調査時間、⑤気象、⑥調査者、⑦情報集計者

としており、右側に各種ごとの合計欄という設定。

各地各施設での解説や掲示など普及啓発活動に活用してきました。

#### 3.2.2 各湖沼に生息する生き物の情報交換

「調査結果集計シート」の配信により各地の概況や生きものの情報交換だけでなく写真等の共有もしてきました。



ヒシクイのほか希少なガンカモ類の情報交換も重要

(←シジュウカラガン  
佐藤安男)

(強い風雪を避け入江に集まる大群↓：岡田成弘)



### 3.3. 普及啓発活動

調査結果は有意義なデータとして、また連携した活動とあわせて新潟の自然や保全活動に役立てるのではないかと他団体や行政と協力して普及啓発活動を進めてきました。また、各湖沼（潟）に関わる小中学校などの環境学習にも貢献してきました。

### ◆ 2015年の新聞記事の情報（情報提供）



#### 3.3.1 シンポジウム報告等

- ・2001年 第2回ラムサールシンポジウム新潟で発表
- ・2007年 日本白鳥の会総会発表
- ・2010年 「白鳥が教えてくれた」シンポジウム\*  
新潟県水鳥湖沼ネットワーク10周年記念

第4回福島潟フォーラム「新潟のみなさん、子どもたちに伝えたい報告会」

## 白鳥が教えてくれた

調査10周年記念・・・瓢湖・福島潟・鳥屋野潟・佐潟  
10年間の調査からわかったこと・・・

**新潟**

コハクチョウ  
オオヒシクイ  
カモたち

田んぼ  
湖  
人

**日程 2010年11月3日(水・祝)**  
**時間 13:30～16:00** 4湖ミニ写真展

**会場 水の駅「ビュー福島潟」**  
〒950-3328 新潟県新潟市中央区新保町乙492番地  
TEL:025-387-1491 FAX:025-384-1200  
参加無料・要申し込み

**プログラム**

第1部 13:30～ ①開会・四湖スライドショー  
②紙芝居「わたると新潟」  
③4湖と調査者たち  
14:30 休憩

第2部 14:40～ ④全国のガンカモ調査の視点から  
⑤10年間の調査からわかったこと  
⑥交流タイム(会場のみなさまと)  
16:00 閉会

主催 **新潟県水鳥湖沼ネットワーク** 共催 **新潟市**  
後援 阿賀野市 日本野鳥の会新潟県 新潟の白鳥を守る会 新潟県野鳥愛護会 NPO法人パートナー  
環境省関東地方環境事務所(申請中) 新潟県(申請中) 新潟市教育委員会

◆新潟県水鳥湖沼ネットワークとは

越後平野に広がる主要な水鳥飛来地である鵜沼、福島湖、鳥居野湖、後潟の4湖沼の自然と野鳥に関わる有志(行政、野鳥の会、NGO、個人)が、ハクチョウ越冬、ガン類が渡来する10月から渡去する3月までの約半年間、毎週金曜日の夜明けからほぼ同時に4湖で生息数調査を行い、越後平野でのくらすいの大規模水鳥が渡来、生息するのかを調べることが目的として2000年10月に結成されたネットワークです。累計した結果から4湖の生息状況を把握するとともに、調査結果をさまざまな形で公表し、越後平野と豊かな自然が共存する湖沼の大切さをより多くの市民の皆様に知っていただくことを願って調査活動を行っています。

◆主要ネットワーク構成メンバー

- ・鵜沼(阿賀野市) 阿賀野市湖沼管理事務所 鶴湖の白鳥を守る会
- ・福島湖(新潟市東区) 水の駅「ビュー福島湖」
- ・鳥居野湖(新潟市中央区) 日本野鳥の会新潟県
- ・後潟(新潟市西区) 新潟水鳥・湖沼センター

◆活動内容

- ・各湖沼における大型水鳥飛来期の生息調査
- ・調査結果集計及び関係機関へのデータ送付
- ・各湖沼に生息する生き物の情報交換
- ・各湖沼に関連するイベント、地域参加への協力と情報交換、概要報告・発表

◆10年間の調査からわかってきたこと

ハクチョウたちは10月の中旬頃から新潟県内に飛来し、11月下旬から12月上旬にかけて急増、最大数となります。その後はゆるやかに減少しながらほぼ同じレベルで推移しますが、年が明け1月に入ると、それまでの鵜沼、福島湖を中心とした集中型から、後潟を中心とした各湖沼に分散する傾向が見られます。これは積雪など天候との関係が大きく影響し、積雪量が多い年にはその傾向が強くなり、雪の少ない水田での餌の確保と、積雪が少なくより安全な越冬としての利用用が大きな理由であると考えられます。このようにハクチョウたちは越後平野の湖沼と水田を天候に合わせて広範囲に利用することによって、3月下旬に北方の繁殖地に戻るまでの約半年の間、多量のハクチョウが県内で越冬できるものと推察されます。また、印象として、「柔軟行動するハクチョウたちがいる反面、我慢強いハクチョウたちもいる。ヒシキはハクチョウよりかなり狭狭強く、行動の際はよりダイナミック」といえるようです。

越後平野は水田や湖沼が隣接、まじりに一体になっており、水鳥の生息地として広大且つさまざまな重要な湿地といえます。各々の湖沼の環境だけでなく、越後平野全体の視点での環境保全、重要地保全の認識をすることができるとなりました。

また、新潟県湖沼ネットワークは行政、市民、NGOなどの互いの立場の違いを超えて協力しあう湖沼間の連携というから生まれました。これが互いの理解や交流、情報交換だけでなく、市民への正しい情報提供と越後平野と各湖沼の価値の理解につながれたのではないかと考えています。今後もこのつながりを軸に越後平野というハクチョウ越冬、ガン類の生息地保全に向け、地域住民や行政とのつながりを進めていけたらと願っています。

◆調査結果の一瞥

作成:新潟県水鳥湖沼ネットワーク 平成22年11月3日

・2016年 雁と白鳥シンポジウム  
「鳥のくらしと水辺の環境」

目的:新潟での野鳥調査の視点から水鳥の生息地である越後平野の生物多様性を理解し、潟や水田を中心とした新潟の水辺の環境保全の普及啓発を目的とする。

主催:水の駅「ビュー福島湖」

共催:日本野鳥の会新潟県/新潟県水鳥湖沼ネットワーク/新潟市(潟環境研究所/環境政策課/北区地域課)

後援:阿賀野市/環境省関東地方環境事務所/新潟県野鳥愛護会/瓢湖の白鳥を守る会/にいがた野鳥の会/福島湖野鳥の会



シンポジウムのようす

・2015年 雁と白鳥シンポジウム

新潟県水鳥湖沼ネットワーク15周年記念

# 雁と白鳥

## シンポジウム

一新潟の白鳥(ハクチョウ)、湖沼の白鳥(サオホシロイ) 誕生15周年

平成27年3月15日(日) 13:30-16:00

会場:水の駅「ビュー福島湖」6階研修ホール  
(新潟市中央区新田乙2-493)

越後平野の湖や水田で暮らす野鳥の姿を定めたウインター生息数調査を振り返ります。水鳥のシンポジウムからの話題や記念品のDVDもああります。

●プログラム

- ①基調講演 日本野鳥の会 ウィンター調査チームリーダー オールアンジェリー 中村 聡 氏  
「新潟市の湖、阿賀野湖の白鳥、新潟市中央区の湖」報告
- ②今年各地からの報告(鵜沼、福島湖、阿賀野湖、鳥居野湖、後潟)
- ③白鳥物語 結菜「わたると福沼」上映
- ④「鳥のいる湖 湖にいる鳥」読書  
大橋 孝氏(水の駅「ビュー福島湖」名誉会長/新潟大学 名誉教授)  
千葉 真氏(新潟県野鳥愛護会 副会長/日本医科大学 名誉教授)  
岡田成弘氏(日本野鳥の会新潟県 副会長/新潟県水鳥湖沼ネットワーク副代表)

参加無料 事前申込み

主催:水の駅「ビュー福島湖」申込み問合せ 025(387)1491

後援:新潟県水鳥湖沼ネットワーク・新潟市  
後援:阿賀野市・瓢湖の白鳥を守る会・日本野鳥の会新潟県

～雁と白鳥シンポジウム～

# 鳥のくらしと水辺の環境

雁や白鳥が暮らす新潟の潟や水田は、その新潟の自然環境の中で野鳥はどんな暮らしをしているのだろうか?!

平成28年2月28日(日) 13:30-16:30

会場:水の駅「ビュー福島湖」6階研修ホール  
(新潟市中央区新田乙2-493)

●プログラム

- ①基調講演 鳥のくらしと水辺の環境 千葉 真氏(新潟県野鳥愛護会 副会長/日本医科大学 名誉教授)
- ②今年各地からの報告(鵜沼、福島湖、阿賀野湖、鳥居野湖、後潟)
- ③白鳥物語 結菜「わたると福沼」上映
- ④「鳥のいる湖 湖にいる鳥」読書  
大橋 孝氏(水の駅「ビュー福島湖」名誉会長/新潟大学 名誉教授)  
千葉 真氏(新潟県野鳥愛護会 副会長/日本医科大学 名誉教授)  
岡田成弘氏(日本野鳥の会新潟県 副会長/新潟県水鳥湖沼ネットワーク副代表)

参加無料 事前申込み

主催:水の駅「ビュー福島湖」申込み問合せ 025(387)1491

時:午前9時～午後3時 休:月曜日(休曜日の祝日は要目)

共催:新潟市・新潟県水鳥湖沼ネットワーク・日本野鳥の会新潟県  
後援:環境省関東地方環境事務所・阿賀野市・新潟県野鳥愛護会・瓢湖の白鳥を守る会  
にいがた野鳥の会・越後平野野鳥の会

「雁と白鳥シンポジウム」

(平成 28 年 2 月 28 日水の駅「ビュー福島潟」にて開催)

基調講演 鳥のくらしと水辺の環境 千葉 晃 先生  
(新潟県野鳥愛護会副会長／日本歯科大学名誉教授)

越冬生活の概要とコミュニケーション：新潟平野は日本に渡来するコハクチョウの最も重要な越冬地の1つであり、個体数は最近数十年間で明瞭な増加を示しています。その背景には冬季における採食環境の改善や保護思想の浸透があり、埤（ネグラ）も潟湖中心に河川中州や湛水された水田（冬水たんぼ）へと広がっています。ハクチョウはペアや家族の絆が強く、これらを中核とした様々な規模の群れで埤（湖沼）と餌場（水田）を往来し、積雪状態にも応じた越冬生活を送っています。

(基調講演要旨より引用)

3.3.2 その他普及啓発

紙芝居「わたると新潟」DVD 作成、発表、配布

2010 年「白鳥が教えてくれた」新潟県水鳥湖沼ネットワーク 10 周年シンポジウムでの発表を目標にメンバー有志で DVD 紙芝居を手作りしました。わたるといふハクチョウを主人公としたハクチョウ家族が越後平野にやってきて一冬過ごすストーリーとしました。子どもにも楽しく理解できるようにわかりやすく 16 分の動画にまとめました。各施設や地域、学校で活用されています。



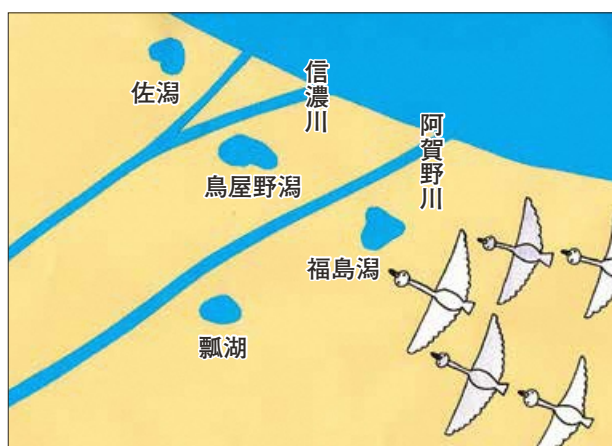
DVD 紙芝居「わたると新潟」

紙芝居「わたると新潟」



原画：野沢 沙樹

制作：新潟県水鳥湖沼ネットワーク



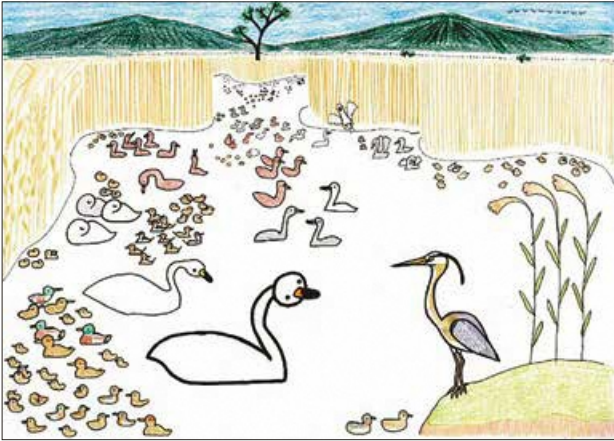
①越後平野を空から眺めると、大きな2本の川と、大小さまざまな潟や湖がある。



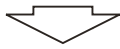
②複雑に島が入り組む福島潟。外側からはよく見えないけど、潟の中をのぞいてみると・・・？



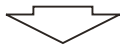




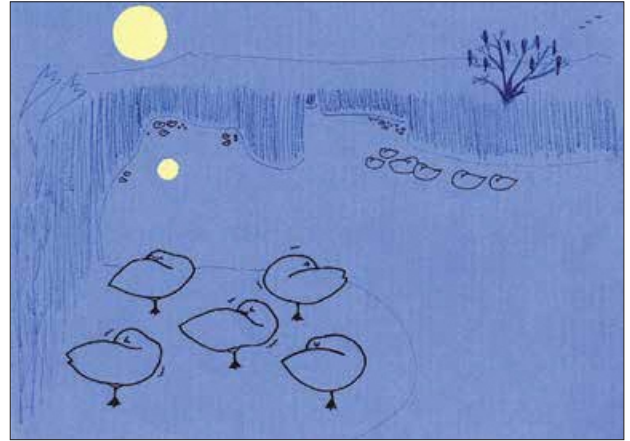
③ 渡り鳥たちが安心して羽を休めているんだよ。越後平野でのぼくたちの冬を紹介するね！



④ お米を刈り取った後の落穂や二番穂が、ぼくたちのごちそう。越後平野は大きなレストラン♪



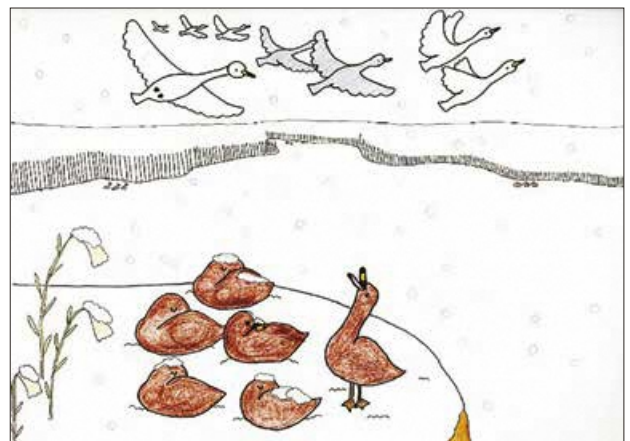
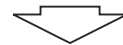
⑤ 雁の仲間オオヒシクイも、冬の越後平野でぼくたちと同じような暮らしをしているんだよ。



⑥ 昼間は田んぼでご飯を食べ、夜は湯や湖でゆっくりと休む。

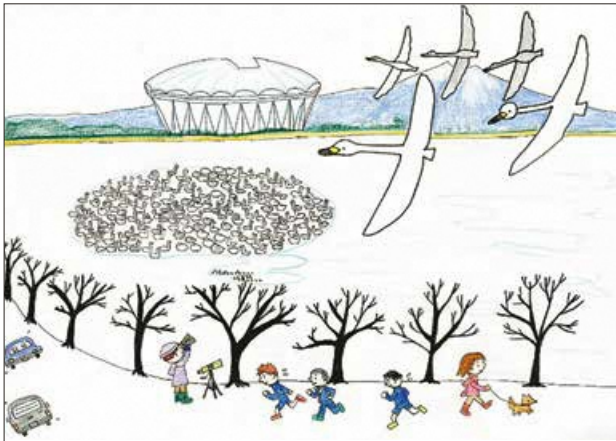


⑦ 雪が降っても大丈夫。けれどあまり続くと田んぼが雪で埋まっちゃう！

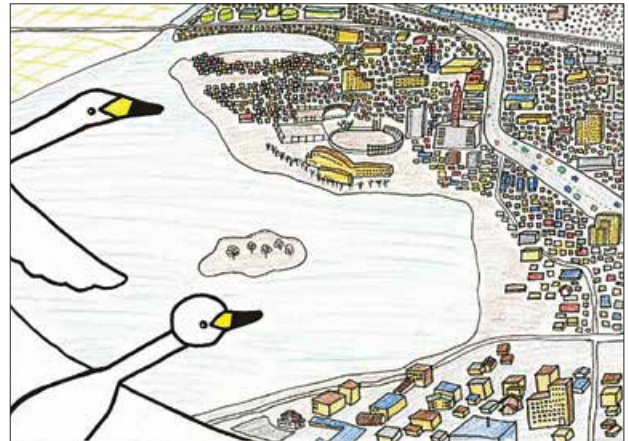
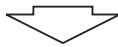


⑧ 仕方ない、雪の少ない他の湯へ移動しよう。

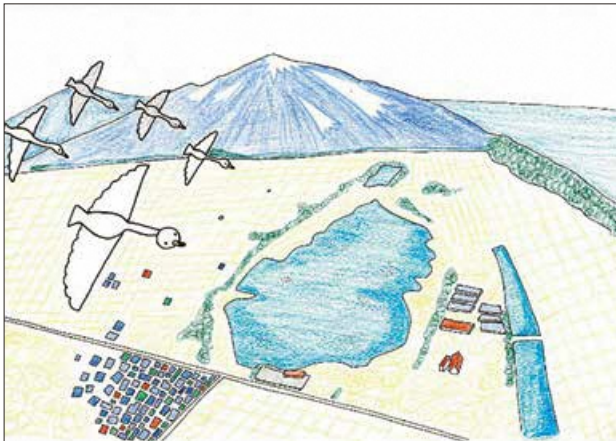
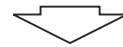




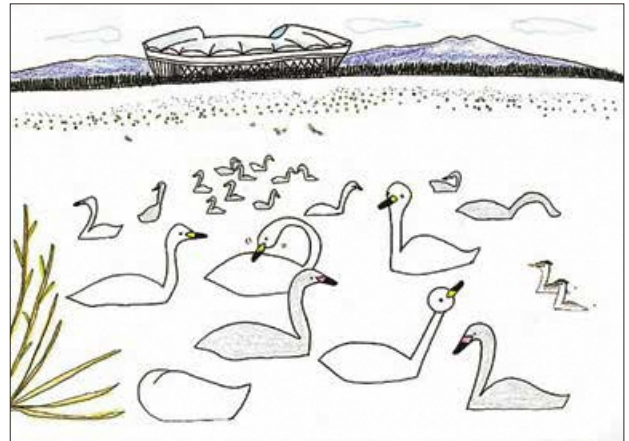
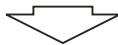
⑨阿賀野川を越えると、雪が少なくなったなあ。  
鳥屋野潟は満員みたいだ。もうすこし西へ行こう。



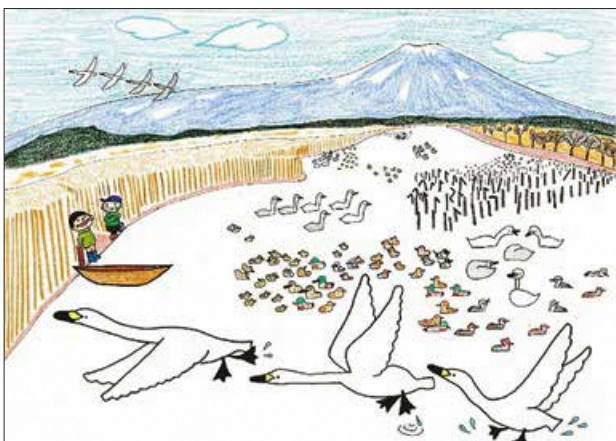
⑩鳥屋野潟は新幹線や大きな道路、街のすぐ近くにある。  
潟の中は意外と快適なんだ。



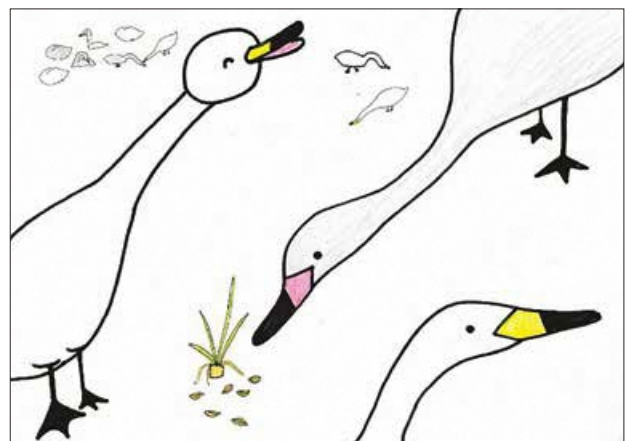
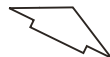
⑪信濃川を越えて、佐潟が見えてきた。こちらはもっと  
雪が少ないし、ここならゆっくりできそうだ。



⑫「新潟駅から車で5分、3000羽の白鳥に会える」な  
んて、ちょっと素敵でしょ？

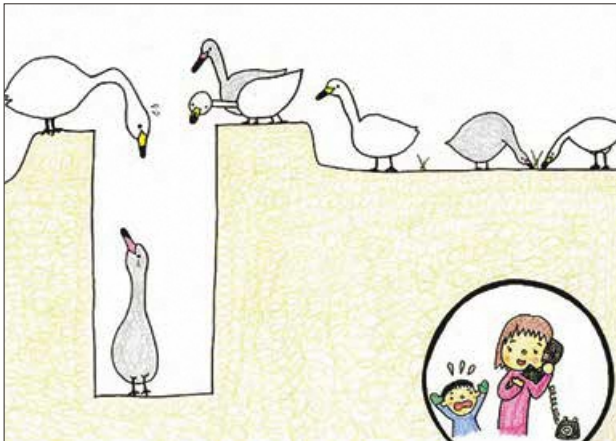


⑬佐潟では冬 漁師さんが、ぼくらが食事に出かけてい  
く頃まで、舟を出すのを待っていてくれるんだって。



⑭越後平野はどこへ行っても田んぼがあって嬉しいな。  
でも、冬を過ごすには危険もある。

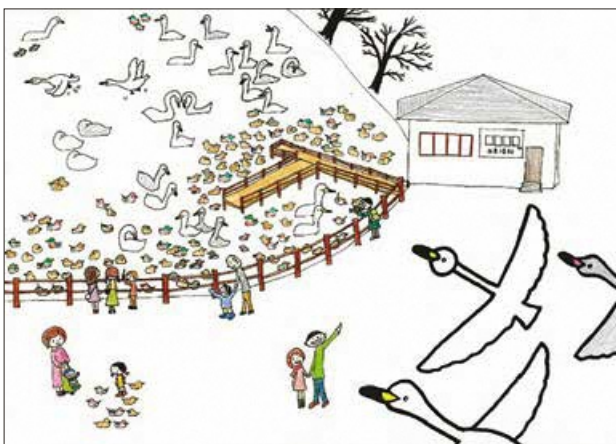




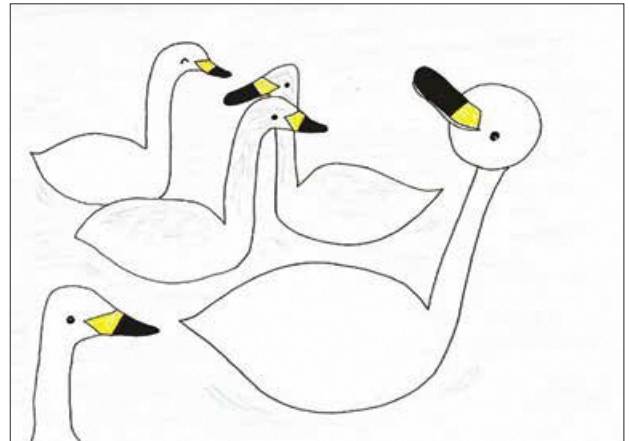
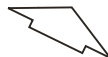
⑮水路に落ちて出られなくなったり、電線にぶつかってけがをする鳥もいる。



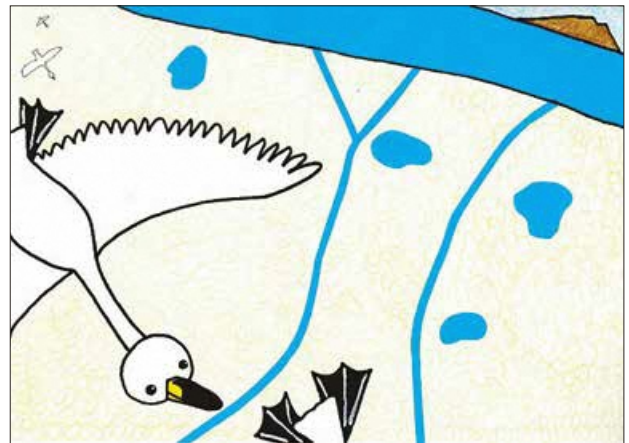
⑯そんな時、人が助けられることがある。けがをしていなければ、その場で放してくれる。



⑰瓢湖はそんな「人」を観察することができる場所。たくさんの方が訪れる。白鳥も、新潟県で一番たくさんやってくるんだよ。



⑱そして、3月には、北へ向けて出発する。夏をすごすシベリアへ4000kmの北帰行だ。



⑲潟と田んぼ、ぼくらを優しく見守る人々が居る新潟・越後平野。来年もまたよろしくね!

おしまい (つづく)

#### 4. 終わりに

新潟県水鳥湖沼ネットワークが立ち上がり、各地と連携調査を開始しまもなく20年になります。真っ黒な髪であった人も白いものが増えてきました。秋から春先の6カ月間に及ぶ毎週金曜日の早朝調査は特に厳冬期に道路事情も伴い楽ではありませんでした。望遠鏡を覗く目に雪や風が入り顔がぐしゃぐしゃになっていたこともあり。ふと「なんでこんなことしてんだろ?」や「仕事でもなし、もう十分じゃないか」と思ったことはいくらでもありました。しかし絆は深まっていました。継続という力がお互いを慰め支え合う関係になっていました。各地で同じ時間に「仲間が調査をしている」という連帯感。言葉にはならないこのつながりが様々な事業も熱意を持って行えた原動力であったと思います。

前回10年を迎えた際には、振り返りとまとめで10周年記念シンポジウムを開催しました。調査活動の結果や成果も見えてきました。まもなく来る20年を機に成果や影響についてもしっかりと見える形にしていけないかと考えています。義務は全くない中での調査活動ですが、調査結果や関心を持ってくれる方々の頷きと笑顔が嬉しくて、継続していこうという気持ちにつながります。

ハクチョウやヒシクイたちは野生生物の一種にすぎません。しかし、潟でも田んぼでも特に目立つ生きものであり生態系の上位にあると思います。その生態系ピラミッドには、土壌があり微生物がいて植物、昆虫、爬虫類、ほ乳類も棲んでいます。そこには潟や田んぼに関わる人との歴史とそこで育まれたこの地の文化も感じられます。ハクチョウやヒシクイがいる風景にはこれらを包括した生物多様性の大きさが存在しているのではないのでしょうか。ハクチョウが棲めない新潟は、新潟という存在自体を失うことにもつながりかねません。田んぼを含めた潟、湿地の存在を誇りに思う風土を醸成し未来に継承していく努力をしていきたいと思います。

湿地だらけの新潟、新潟全体が湿地で成り立っているようにも見えます。その新潟は世界の湿地保全を進める「ラムサール条約」を参考に、「保全」「賢明な利用」「CEPA(対話、教育、参加、啓発活動)」の視点にあてはめつつバランスをとることが肝心に思いますし、新潟の歴史や成果はラムサール条約を通して他の湿地や国々にも貢献できるのではないのでしょうか。

ハクチョウたちは経験や学習を通して自らの身を守り、生き抜く力があることを感じます。科学的にも彼らの能力や生態はすべてわかってはいませんが、私たちの想像以上の能力があるように思います。とはいえ、私たち人間が誤った選択を新潟の環境に与えることがあったとしたら生息地として選択されないばかりか、生存自体も危ぶまれる可能性も出てきます。

この新潟の地をふるさととして毎年やってくる彼らは仲間であり家族であり運命共同体にも思えます。彼らは

私たちに新潟というふるさとの大切さを教えてくれるように思います。

新潟県水鳥湖沼ネットワークの連携調査に若い方々が参加いただきつつあります。新たな展開へとバトンを渡せるよう取り組んでいきたいと思います。

#### 5. 引用文献：

千葉 晃：越後平野の潟湖と野生鳥類の生活  
(シンポジウム「鳥のくらしと水辺の環境」講演要旨)  
2016.2